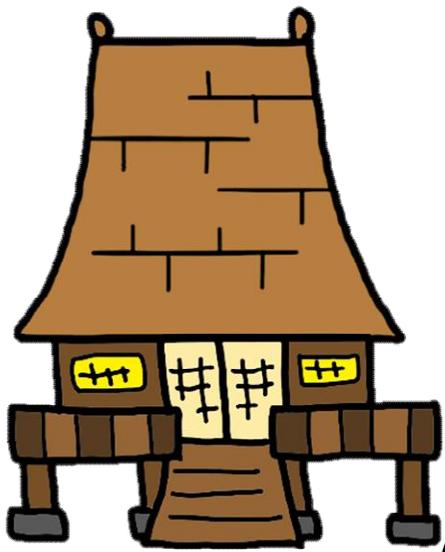
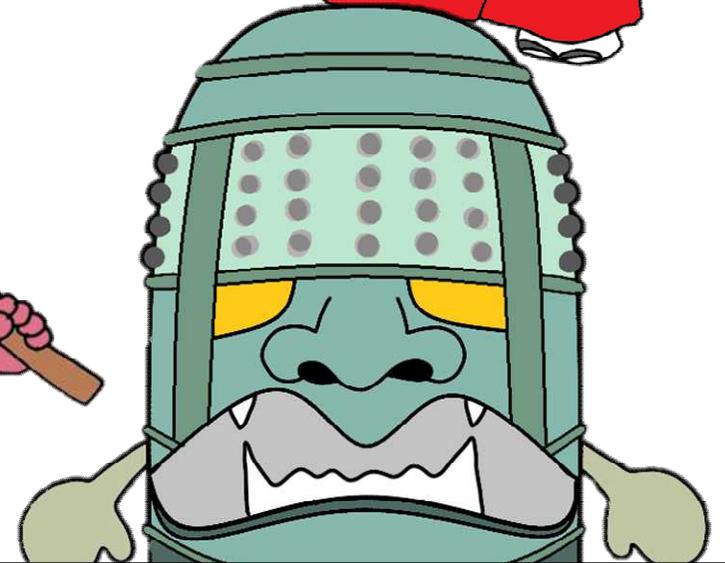
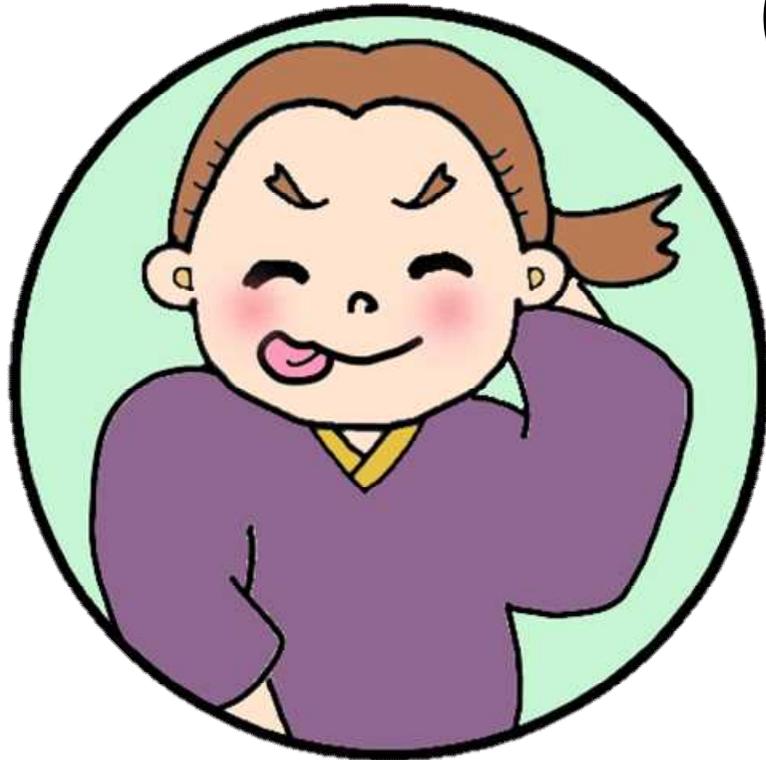


つがるの昔っこ(昔話) 20

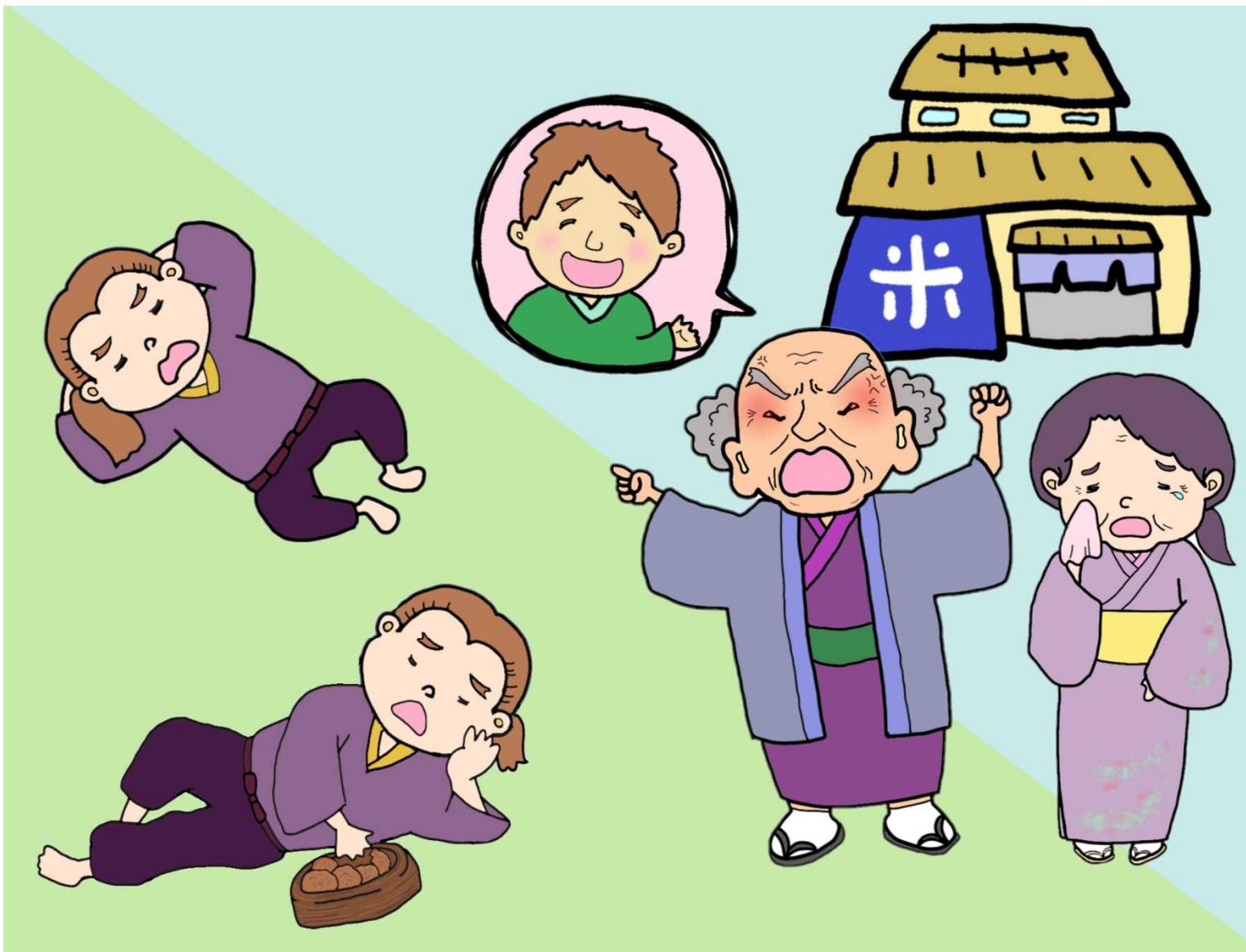


# 化け物寺 (木魚・鐘・太鼓) (津軽弁)



国土交通省 東北地方整備局  
岩木川ダム統合管理事務所  
イラスト、カラーリング  
:やざわ ゆな

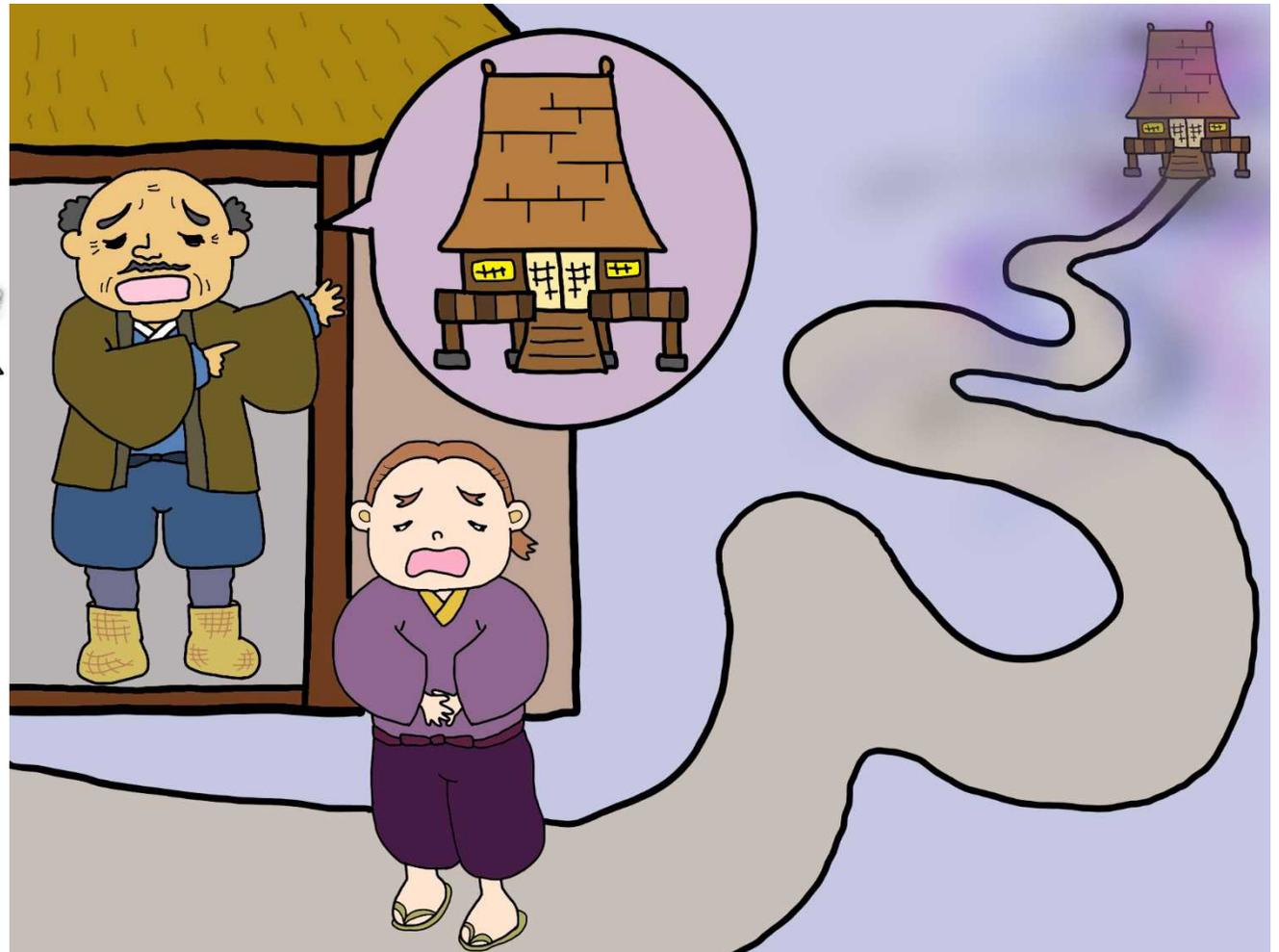
むがあし、大っただ商人(あきんど)の家さ、からっぽね病みの長男(あに)居であたど。  
何も仕事さねて、ゴロサロゴロサロしたあたど。したどごで親だぢあ  
『汝だけんたからっぽねやみさ、この家継がへるわけに行がね。  
家あ次男(おんじ)さ継がへるはで、お前あ何処だり出で行げ』て云(し)て、  
長男(あに)さ勘当着へだど。



息子あ出はて行ったばて、腹も減てくる、日も暮れでくるし、  
やっと知らね村コさ来て、

『今晚一晚、宿コ貸してけへじゃ』て云て歩いたばて、誰も宿コ貸してける人無(ね)。

村はずれの家の人あ、『あすこさ古い寺あるはんで、あそごさ行って泊まなが』て知かへてけだど。  
したばって。そごあ化け物寺であったど。



何も知らねアニあ、寺コさ行ったずおん。

行ったきゃ、炉コさ、火こコンコど燠（おご）ってあって、でっただ鍋かがって、旨（め）そうだ汁あくつくつど煮だって、そばさ酒コの徳利も置いてあたど。

『誰だ居へんがあ』て呼ばたばて、誰も出で来ねど。

腹減ってらアニあ我慢でぎねぐなって、鍋のもの二、三杯もムタムタど食て、酒コもキューって一杯飲んだど。



そしてらきや奥の方からガヤガヤず声して、グアツモツ、グワツモツず音聞けて来たど。  
アニあハツと思て押入れの中さ入(は)てかぐれだど。

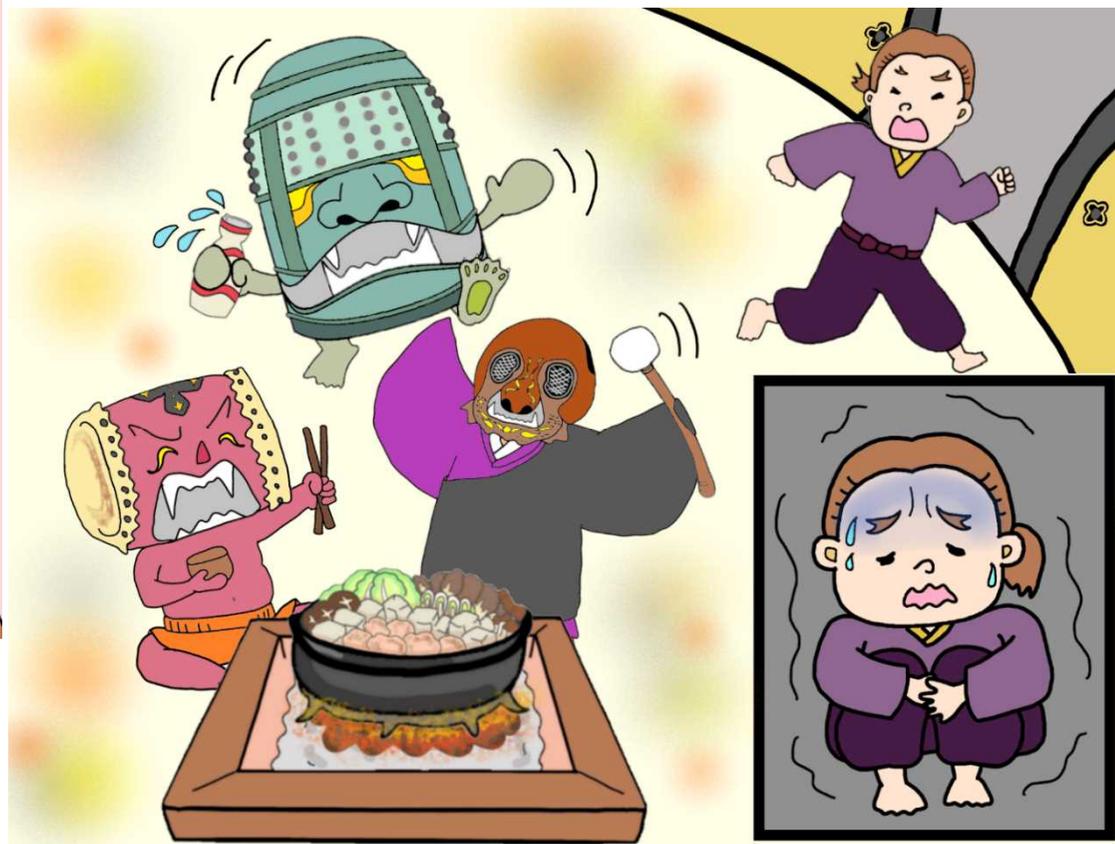
押入れの戸コ少ーしあげて見てらきや、火元(しぼど)のまわりさ集まって座ったのあ  
古い木魚ど、古い鐘ど、古い太鼓の化け物であたど。

化け物達あ鍋ばつついで、酒飲んで騒いでらずおんな。

『このごろ俺達(おらだち)の事あ、知られて来たがさ、誰もこの寺さ来る人間居なくなてまた。  
しばらく、人間の血コも飲んでねし、肉コも食てねえ。誰が迷ってくる奴あ居ねべがな』

『んだきやなあ、あーあ、人の肉、腹いっぺ食てもんだなー』

それば押入れの中で聞いてらアニあ、どってんして、  
怖くて怖くてブルブルブルブルて、ちぢぐばってまったど。



してるうちに、  
『そろそろ始めるが』て、化け物達あ立ちあがって、化け物達あ踊コ始めだんだとせえ。

♪古い木魚に古い鐘

古い太鼓に古い寺

ポクポク ガンガン ドーン♪て、化け物達ア踊ったずね。

アニあ、食われればまいねど思て、押入れの中で、ギリッと目(まなぐ)つぶって、  
咳出ればまねど思てロバおさえて、くしゃみへばまねど思て鼻バつまんで、静がーにしてらんだど。

♪古い木魚に古い鐘

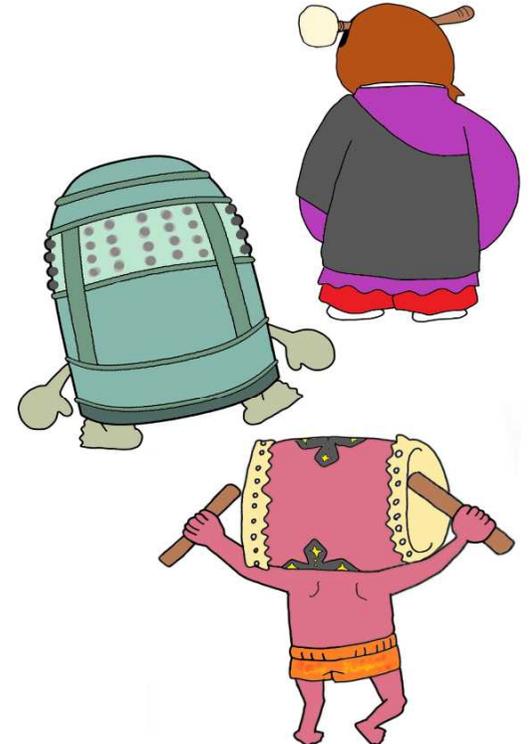
古い太鼓に古い寺

ポクポク チンチン ドーン♪化け物達あ調子こついで、いづまんでも踊てらずおんな。

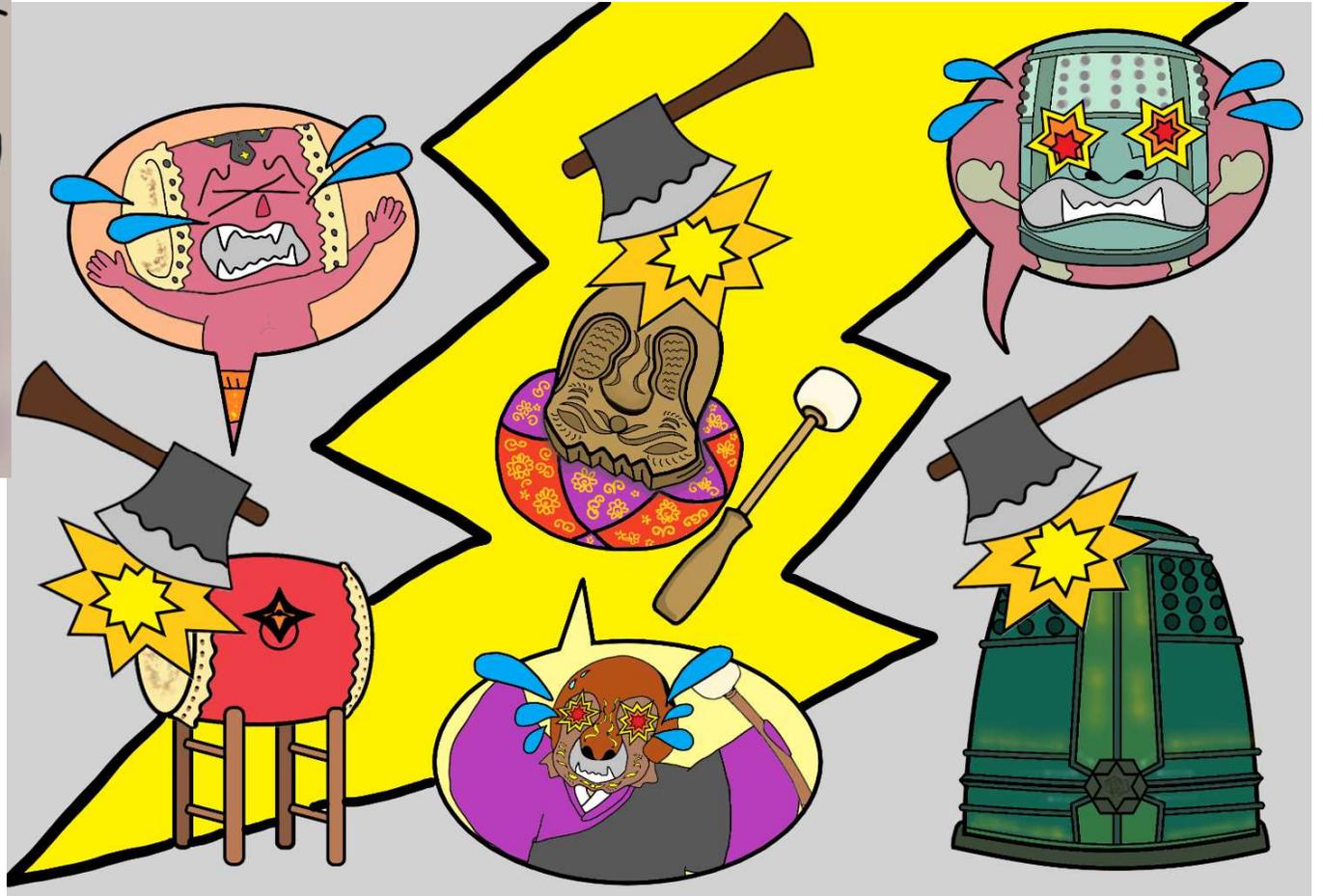
してるうちに、鶏コ鳴ぐ声聞けできたどごで

『さあ、へば、今夜は、ここでおぐべし』て木魚ど鐘ど太鼓ア、元の場所さ戻って行ったど。

古い木魚に古い鐘



アニあ、おそろおそろ押入れがら出はて見だど。  
うって見だきゃ、めんじゃのそばのへっついのはぎさ、まさがり立てであたど。  
これあいいもの見つけだど思て、それば持って古い木魚とばわっつど割たど。  
木魚『ギャーツ』て叫んで静かになたど。  
今度(こんだ)、鐘とばがっつどつぶしたど。  
鐘も『ギャー』て叫んで静かになたど。  
最後に太鼓のどごさ行って、これもものっつど割って、ジャオーツと皮裂いたど。  
太鼓も『ギャアア』て云て、静かになてまたど。



そごさ夕(ゆべな)、寺さ行て泊まれて知かへだ家の人ど村の衆ドヤドヤど来て、  
アニが退治した化け物共(ど)ば見てドッテンして、それからみんな大よろこびしだど。

『これだこれ。これあ今まで人取って食った化げ物共だな。

アンサ、お前(め)様、よーぐ退治してけだなあ。これでもう、村はみんな安心だじゃ』て云て  
村さ連れて行って、アンコさ沢山(いっぺえ)ご馳走こしらえて食へだど。

そして、総代様の村長だの、みんなジョロジョロど来て、

『これから安心してお寺さ行て先祖の供養出来すじゃ。

ついては、アンサ、お前(め)様、この寺の住職になってけへじゃ』て頼んだど。

『我あ、なんも知らねはんで、まいねじゃ』て云ても、みんな、なんとかたて云て、

アンコ、とうとう、この村の坊主になってまたど。

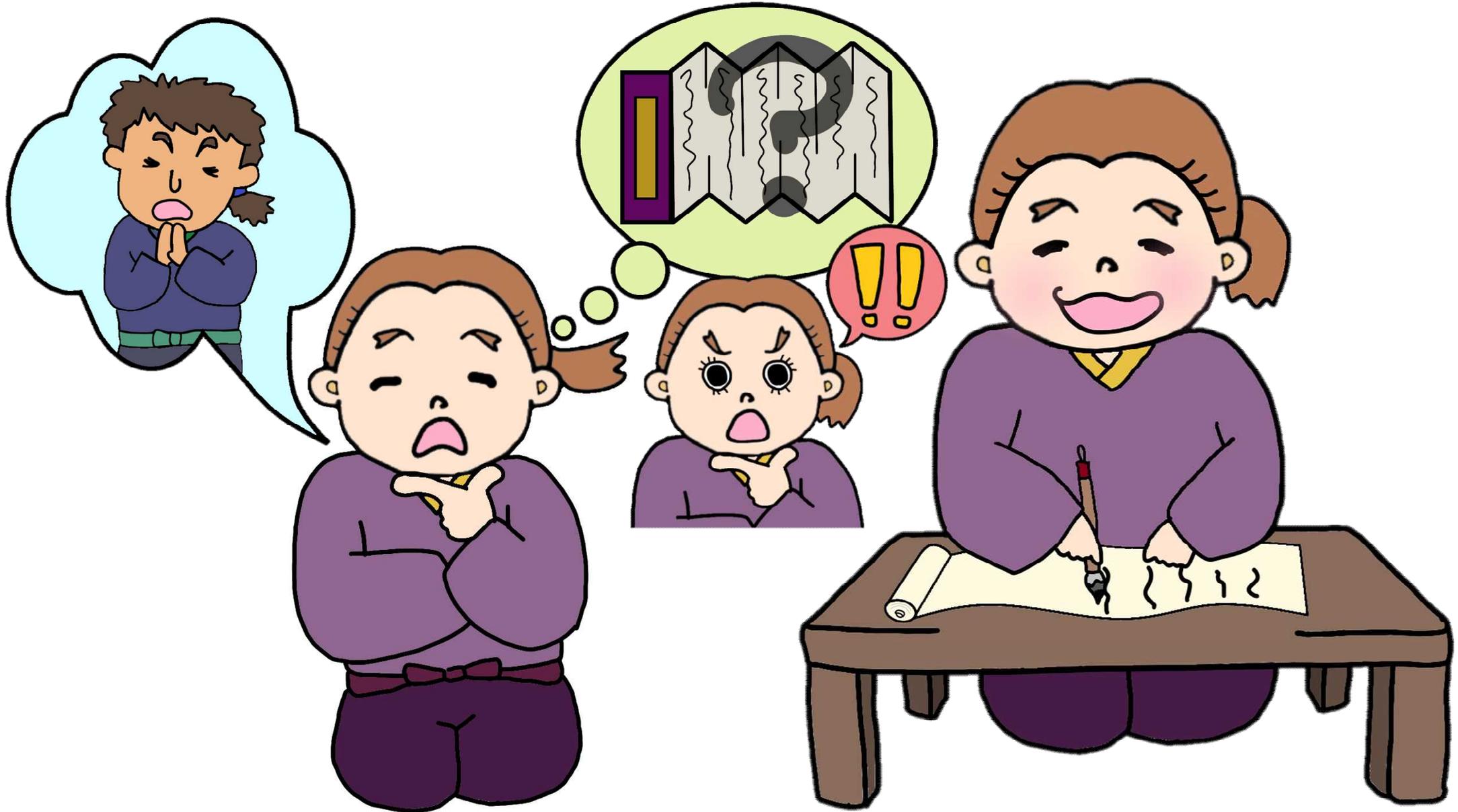


そしてらきやある日

『おえの家で法事あるはで拝みに来てけろ』て云(す)使い来たど。

『はい』て云(し)てみだばて、にわか坊主のアンコだもの、お経読むほうも何も知らねでばな。  
いろいろ分別してみでらきや、ふと一つの考え浮かんだど。

早速墨ど紙ば出して来て、何だかさかんだがさ、スルラスルラて書き付けだど。



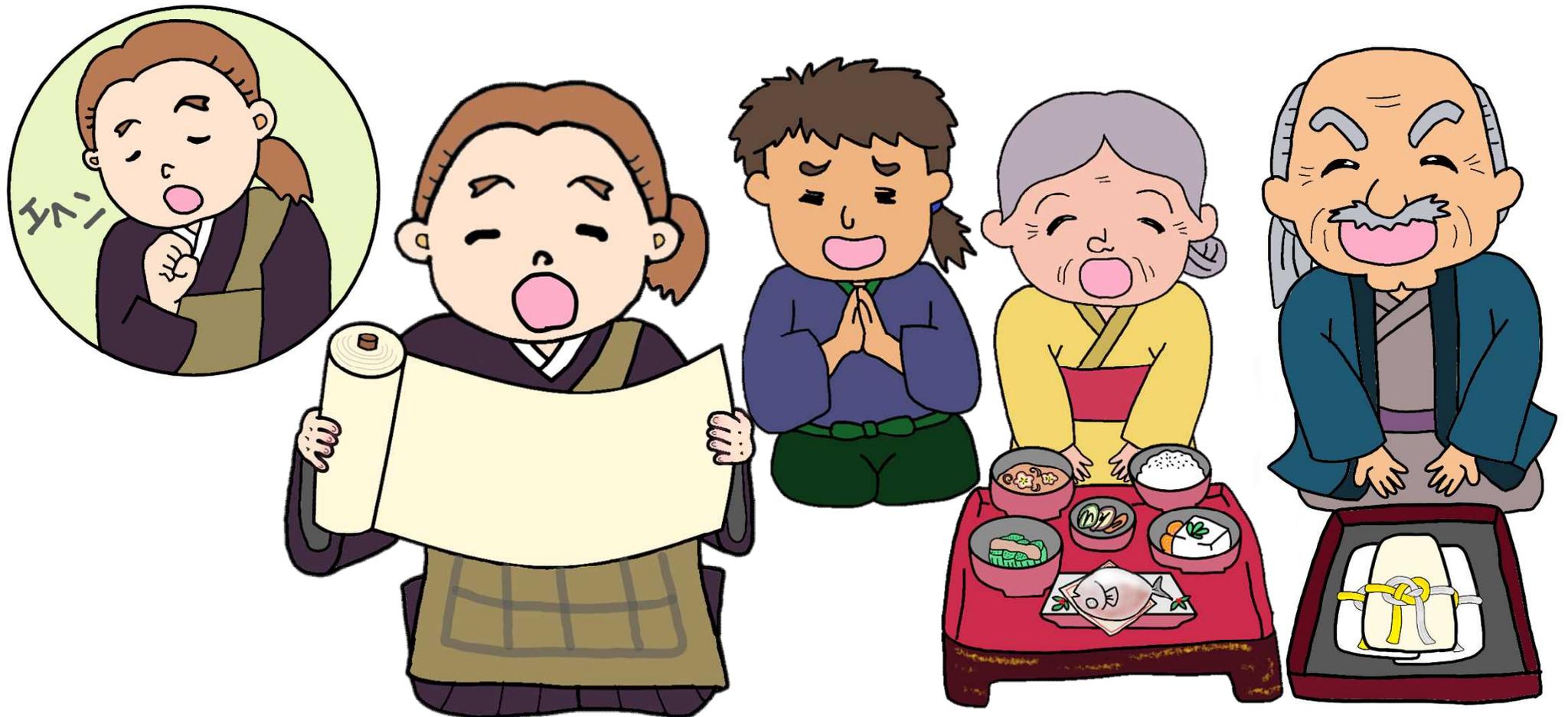
法事の家さ行って席さついてから、『エヘン』てひとつ咳ばらいしてから、  
懐がら書き付け出して、お経ば読んだど。

『てーくーまんまーらーたーつーへー、  
らーれーまでねーらーたーつーなーぐーたーぷーねー、  
だーくらくーごー、だーくらくーごー、れーこーああ……』

家の人たちア

『なんぼありがでえお勤めだばなあ』て云て、お膳ば出して、お布施もうんとけだど。

このからぼねやみのアンコ、怠け者だばて、頭コあなかながまわるアンコであったんだびよん。



実はそのお経ずのあよ、  
『はらへったら、まんまくて、ねふたくなったら、ねーでまれ  
あーこれ、ごくらぐだー、ごくらぐだー』て書いたのバ、さがさに読んだばかりであったんだと。

からぽねやみでも運いいして、頭コまわれれば出世する人もあるずもんだて云(す)話こせ。

とっちはれ。

